# かぐらおか

第 44 号

昭和60年5月15日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（題字は前学長　山田守英氏）

（写真撮影　機器センター 宮川 清志）　カタクリの花

定年退職……星野　了介…2
星野教授退官記念最終講義及び歓送式……2
大学の中で新入生は……藤沢　仁…3
海外だより
　ロスアンゼルスにて……高杉　佑一…4
　Atlanta,GA,30322 ……代田　剛…5
第7回卒業証書授与式……6
学位記授与式……6
昭和60年度入学式……7
研究室紹介(生物学)……上口勇次郎…8
昭和60年度の主な行事……8
昭和60年度運営組織……8
昭和60年度新入生研修(第1回目)……9
スポーツ安全協会傷害保険の加入について……9
第27回東医体全競技終了
　夏季・冬季総合準優勝……9
課外活動物品の返却について……10
窓外……池田　久實…10

# 定　年　退　職

星　野　了　介

私は３月31日に定年退職いたしました。昭和23年北海道大学理学部大学院特別研究生を終え、48年迄北大理学部物理学科、60年迄旭川医科大学一般教育と37年間、大学において教育と研究の生活をおくってまいりました。その間、終戦、戦後の急激な世の中のうつりかわり、新制大学の発足、学生運動など、変動の渦中にあったという感じで、今振り返ってみて長い年月であったというのが実感です。

旭川医大にまいりましたのは、全くゼロから出発する新しい大学づくりに参加できるという二度とない機会であり、少しはお役に立つことが出来そうだと思ったからです。第１回の入学試験の準備、開校、冬に向っての最初の授業の開始と、くる日もくる日もいそがしさに追われる毎日でした。しかし計画し、準備したことが直ぐ形となってあらわれるということが仕事のはげみにもなり教職員にも、学生にも、一体となって新しい大学をつくっていくという意欲をたかめたものと思われます。それだけに一息ついたときの満足感、楽しさはまたひとしおのものがありました。このようにして６年経ち第一回の卒業式を迎えたときは、お祝いしようという気持が学校中に広がりました。

旭川医大の特徴は、教育では６年間一貫教育、研究面では中央研究棟、現在の実験実習機器センターを設け、大学における教育、研究をはかったことです。春に新入生を迎え、６年間ずっと学生の生長ぶりを見守ることが出来たのは、すばらしい経験で、総合大学ではまず不可能でしたでしょう。教育というものの力をあらためて感じました。

先日ある学生から「よく先生がたから第一期生はこうでなかった、第一期生は自分でよく勉強したという話を聞かされますが、今の学生と何かちがっていたのでしょうか」と聞かれたことがあります。私は、若しあなた方が創設当時と同じ状況下におかれたとしたなら、多分第一期生と同じことをしたであろうと答えました。勿論、学生の気質も変ってきてはいるでしょうが、彼等をとりまく環境も大きく変り、年々整備され、形がととのえられ立派な医科大学に生長しております。そうなると人は贅沢なもので、もはや新鮮さを感じなくなっているのではないでしょうか。私は小学校６年生の頃を思い出します。中学の入学試験の勉強をしているときに、担任の先生から「新規まき直し」という言葉をよく聞かされました。大学でも忘れた頃に新規まき直しをしたらどうでしょうか。最近大学教育において、"創造性"と"柔軟性"を涵養することの重要性が指摘されるようになってまいりました。このことは云うはやすく、行うは難いことではありますが、おそらく医学教育に於いてもこの方向を目指した検討がなされるであろうと思っております。

旭川に於ける12年間は、私にとり貴重な経験でした。専門の物理の世界だけに閉じこもっていたのでは想像もし得ない別の世界を垣間見ることができたからです。良き隣人を得、新しい知識を得たことは、今後の生活をより豊かにするであろうと思っております。大学を去るにあたり、教育、研究、そして私生活にいろいろ御世話になった先生方、研究施設、図書館、職員の方々、協力会の方々、皆様にあつく御礼申し上げます。

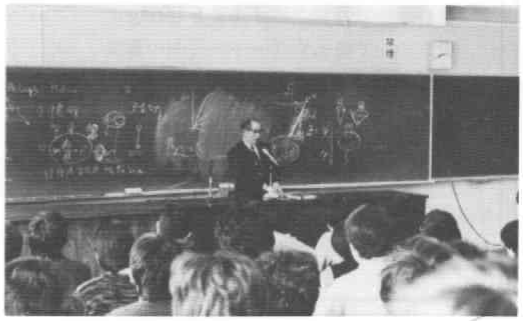
## 星野教授退官記念最終講義及び歓送式

物理学、星野教授の退官記念最終講義は昭和60年２月13日㈬13時20分から講義実習棟第７講義室において講義内容「物理学」について約１時間半にわたり行われた。

また、３月13日㈬臨床第３講義室において歓送式が行われた。

式では、学長より送辞、学生代表・学友会・同窓会等からの記念品および花束の贈呈、引き続き星野教授から退官挨拶があり、学生・職員の拍手に送られ退室された。

（学生課）



# 大学の中で新入生は

藤　沢　　仁

今年の新入生の半数以上が北海道外からの人達で例年になく多い。遠く九州や中国地方、関西からもかなりの数の人達が本学にやってきた。私が旭川に住むようになったのは本学創設の昭和48年のことだから、もう12年めになる。神戸で生まれて小学校は大阪府下の田舎で、中学高校は和歌山で、大学は京都で過ごしたから、旭川に来る前の三年間をアメリカで過ごした以外は関西の文化圏にどっぷりつかった生活であった。旭川に来たばかりの頃は幻想的な雪景色や高原温泉のすばらしい紅葉などに旅人らしい感激をおぼえたが、暫くすると棲み心地のわるさが日毎に強くなった。歴史や文化をも含めて「場所」をトポスというそうだが、棲み家としての北海道になじむには私のような「人みしり」ならぬ「トポスみしり」する者には何十年という年月がかかりそうである。西田幾多郎は「場所の論理」について論じたが、やはり「場所」は日本人にとって主体のあらわれ場所であり、かくれ場所でもあって、なじんだ場所にいることは仕合わせであるように思う。最近は出張などで大阪空港に降り立つと、もの珍しいおちつかない気持ちになるが、私の棲み家が関西から北海道にかわってきたということだろうか。新入生諸君は若いから私よりはずっと早く北海道の神々と仲良しになって、旭川というトポスになじむに相違ない。

★　　★

今年のふきのとうの発見は3月24日であった。それは私の毎朝の散歩道である大学のエネルギーセンターの前の雪解けて僅かにのぞいた地面にあった。新入生が大学にやってくる頃は雪が殆ど解けて旭川の街は車のスパイクタイヤでけずりとられた粉塵にまみれて、一年で一番きたない時である。それから夏休みまでに野や山は一斉に緑になって北海道のすばらしい夏がやってくる。この頃になると新入生は大学のカリキュラムにも慣れ、サークル活動や医大祭を通じて級友や先輩とのつながりを深め、旭川に棲み家としての自分達の世界を作りはじめるだろう。

★　　★

私達の大学のカリキュラムの特徴は六年間一貫教育を目標にした学年制クサビ型である。古くからある大学の医学部に比べると、一般教育の授業時間が少なくなり専門教育の時間が多くなっている。これは高度化した医学や医療技術に対応できる医者を養成しようとの考えからである。一般教育では物理学、化学、生物学のような自然科学系に重点がおかれているようにみえるが、専門医学が論理と実証を基本にした近代科学であるとの考えから、十分な自然科学の素養をつけておくための配慮である。行政機関は大学での医学教育の成果をチェックするものとして国家試験を重視しているが、本大学のカリキュラムで育てられた卒業生はこれまで国家試験の合格率ですばらしい成績をあげている。

★　　★

自然科学系教科をよく勉強することは大切なことである。しかし自然科学偏重は論理と実証を錦の御旗とするいわゆる科学的思考のみが正しいとする考えに通じかねない。国家試験に好成績をあげることは良いことである。しかし国家試験を重視し過ぎると、瞬時判定主義的な傾向を助長することになるだろう。近代科学にとって重要な客観主義に瞬時判定主義的な傾向が加わると、部外者の立場で安易な理論だけに頼って物事を処理する無責任が生まれてくることに注意しなければならない。現代は患者の治療のために、因果関係で論じ得ない個々の人間の心のなかにまで医者がたち入らねばならないことが多いと思われる。客観主義のコンピューター化された医者がそのような患者に対することができようか。大学の自然科学系教科にかたよったカリキュラムの裏に、学生諸君が哲学や歴史や文化人類学や動物行動学などを自分でしっかり勉強してほしいという願いがある。

★　　★

精神医学を研究したフランスの哲学者フーコーは「臨床医学の誕生」のなかで、人間科学における臨床医学の重要性を説いている。一方、フランスの分子生物学者であるモノーとジャコブはそれぞれ「偶然と必然」、「生命の論理」のなかで人間が生物として客観的に分析される可能性について論じている。ジャコブやモノーの考えは私も含めて多くの生化学者の基本となっているが、いま私達がもっている科学的知識はあまりにも小さく、アメーバの存在さえも理論的に全く説明できないくらいのものである。フーコーは臨床医学を論理主義の近代科学としてでなく、経験的なものとして考えていると思われる。医者は患者に対する時、無責任な客観主義に立つのでなく、全ゆる経験を生かして自分でコミットしていくことが大切であると思われる。

（生化学第一講座　教　授）

＊ 海外だより ＊

# ロスアンゼルスにて

高杉佑一

旭川医大の皆様お変りありませんか。私は昨年８月から10ヵ月間の予定でロスアンゼルスのBray教授のもとに来ています。Bray教授は南カリフォルニア大学(USC)の糖尿病・臨床栄養部門の主任教授で、内科学と生理学の教授を兼任されています。国際肥満学会議の会長や肥満の専門誌の編集長をされたほか、代謝、臨床栄養、生理学などの専門誌の編集委員もされています。肥満の面から代謝、老年医学を眺めなおしてみたいと思い、文部省在外研究員の機会を利用してここを訪れた次第です。

USCはアメリカ西海岸で最も歴史の古い私立大学の一つで、19の学部、専門学校からなりたっています。医学部は今年が100周年です。ロスアンゼルスオリンピックの水泳会場になったプールは、USCのmain campusにありここには米国で最初にできた老年学の専門学校((老年学部)Leonard Davis school of gerontologyもあります。この学校は1964年にできたGerontology Centerの一部として運営されており、undergraduate degree(Bachelor of science in gerontology)とgraduate degree(Master of science in gerontology)のコースがあります。他の学部や別の大学のコースを同時に学んで二つの学位(master)を取得する制度(dual degrees)もあり、老年学が広い分野で要求されていることがうかがわれました。

USCの医学部はメインキャンパスから14km、ダウンタウンから８kmはなれたところにあり、道路一つへだてて General Hospital、Womens Hospital、Psychiatric Hospital、Pediatric Pavilionの４病院からなるメディカルセンターがあります。ロスアンゼルス郡立病院(L.A.County Hospital)が1968年にUSCと結びついた歴史があり、LAC-USCメディカルセンターと呼ばれています。スタッフドクターは郡職員で、センターのインターン、レジデント、フェローなどを指導すると同時に、USC医学部の教育職を兼ねています。医学部の名簿をみると内科が最も多く、内科主任１名、14部門主任14名を含めて、教授102名、associate professor114名、assistant professor269名、instructor77名の名が並んでいました。一学年に入学する医学生の数は140名弱です。旭川医大内科の教授３名、助教授３名、講師６名に非常勤講師の数を加えてみても桁違いで、信じられない数です。

USCの医学部は４年制で、前半が基礎医学、後半が臨床医学を学ぶようになっており、３学年に進級するには国家試験(National Boad of Medical Examiners Examination のPart 1)に合格する必要があります。臨床医学のオリエンテーションは１学年からありますが、まだ臨床をほとんど知らない時期から、指導医のもとで毎週４～８時間患者に接する制度もあります。患者中心に医学を学び、教えられたことをおぼえるだけでなく、自ら学ぶ習慣を早く身につけて欲しいという意図のようです。3・4学年になると実習が多くなります。内科の実習は12週間になっています。旭川医大と大きく違うところは、カリキュラムの柔軟性です。関連病院実習を含めて広い範囲からの選択が可能な週が36週もあります。

メディカルセンターにはスタッフドクターが340名、インターン、レジデント、フェローが900名おり、教育病院としては米国でも最大といわれています。General Hospitalの主要部分は1920年代に建てられたものですが2105床、20階建ての堂々としたものです。郡立ということで貧しい人達の受診が主体になっています。

LAC-USCメディカルセンターはロスアンゼルスの救急病院でもあり、emergency roomだけで一日平均約400名の患者を診療している由です。米国でも比較的新しい分野であるemergency medicineを志す全米の若い医師が毎年1000名位志願し、14名が採用されるとのことです。USCの学生は３学年になると希望により選択でemergency roomの実習ができます。

先日ロスアンゼルスタイムスに、肝障害でメディカルセンターに入院したPrzybeulskiという名前の患者のことがのっていました。このアルコール中毒の男性の名前をどう発音するのか誰も分らず、本人は好きなように呼んで下さいというだけでした。しかし看護婦さん達が正しい呼び方をしたいからとくり返し頼んで、shi-BELL-skiというように発音することが分り、 皆がMr. shi-BELL-skiと呼ぶようになったところ、その後の行動が全く別人のように立派になったというエピソードです。45歳の彼の名前を正しく呼んでくれたのは、それ以前には母親と小学校１年の時の先生だけだったということです。

ロスアンゼルスは人種のるつぼとよくいわれます。研究室はもちろん、スーパーマーケット、子供達がかよっている公立中学、高校でも、色々な国から来た人が身近にいます。顔付き、皮膚の色、言葉などからどこの国の人かなと思うことはあっても、外国人として特別視することはだいぶなくなりました。カリフォルニアは多種多様のものを包みこんで同化する明るさとバイタリティーを持っているようにみえます。土地が変わればまた別のアメリカがあるのでしょう。盲が象をなぜている感じにつきまとわれながらも、見聞をひろめ、柔軟性のある視点から物事をみられるようになりたいと考えています。

（内科学第三講座　助教授）

＊ 海外だより ＊

# Atlanta, GA, 30322

代　田　　剛

1．Atlanta(At)とGeorgia(Ga)について

雲一つない突きぬけるような空の青さと乾燥した空気、これがAtに着いた時に私が持った第一印象でした。

冬の近さを思わせる昨年10月1日に旭川を発ち、一足飛びで着いたAtは、夏から秋への変わりめでした。Atは人口約210万人を擁する、アメリカ第16位の南東部きっての大都市で、Ga州の州都でもあり、昔より交通の要所として発展して来ました。その役目は現在も変わらず、市内には多数の鉄路が交錯し、今でこそ旅客を運びませんが、Diesel機関車5台に引かれた百数十輌の貨車が行ききするのが見られます。又、1分30秒ごとに飛行機が離発着するAtlanta International Airportは、世界第2位を誇ります。更に道路の面でも、東部海岸諸都市からTexasに下るHighwayと、中央部諸都市とFloridaを繋ぐ、Highwayの交差点でもあり、非常に重要な所です。

このAtは、商業ばかりでなく、古くは軽工業、そして最近は化学工業などもおこり、その人口増加は、この5年間で55万人です。このような産業の発達につれて、大都市の割には少ないと言われていた日本人居住者も、企業関係を中心に増加し、その数3,000人くらいと言われています。日本人にはなじみの薄いAtですが、次の点では想い出される人もいるのではないでしょうか。一つは、Margaret Mitchell作『風と共に去りぬ』の主舞台Taraは架空ではあるがこの近郊と考えられる点、もう一つはこの小説とも関連する南北戦争の際、南軍の中心都市であったため、Sherman将軍により徹底的略奪を受け、街全体を完全に焼き尽された点です。

さてAtの属するGa州は、合衆国南東部に位置し、南部は大西洋に面していますが、北部はAppalachia山脈にかかり、面積はやや北海道より大きく、人口は550万人とほぼ同じです。産業は、一口に言えば平野部のピーナツ・ピーカン等のナッツを代表とする農業州で、Carter前大統領は、正しくその代表で大地主です。このような状況が医療事情やEmory大学に反映していると考えられます。

又、マスターズがおこなわれるAugustaがGaに属しているのもゴルフファンには忘れられません。

2．Emory大学

Emory大学は1836年創立の市立大学で、Medicine・Law・Chemistry・Biology・Music・Religion・History等のSchool又はDepartmentがあり、標題の30322は所在地のZip codeです。学生数は約8,000人で、授業料はCollegeで年間約180万円、Medical Schoolでは270万円ですからかなり高額ですが、数々の奨学金が学生に用意されていますから、かならずしも裕福な家庭の子弟ばかりではありません。医学生はCollegeを卒業してから来ますので、日本よりは年長となり、PhD保有者もかなりいます。Ga州には、小規模のものを除くと他に医学部は、Augastaに州立があるだけです。本年度の医学部入学者の約半数は他州出身者です。女性は皆無で、人種はWhite102、Black 6、Puerto Rican 1、Asian 1です。

Emory大学は、一口でいうなら臨床分野に有名な人々を有しています。勿論基礎的研究も多方面で行なわれ、学生のうちから研究室の一員となり、発表している学生も多数おります。これは、Collegeで基礎を修めてきていることと深く関係しています。実習は、選択が大巾にとりいれられているのが日本と大きく違います。私のいる神経病理学部門（主任武井義雄教授）にも、時々1ヵ月間学生が実習にきます。このように医学の分野に関して

の日本との相違点がいくつかありますが、私なりに感じた点を書いてみます。もとより、一大学の短期滞在という条件付きでの話です。まず学生・さらにはレジデントは、極めて知識が豊富です。しかもその知識は、片よることなく保有されています。例えば脳神経外科のレジデントをとるならば、神経解剖・神経病理・神経生理・臨床事項等どれも一応のレベルに達しています。又、スタッフのレジデントに対する教育は、実際例に即し普段に行なわれているのが特徴です。これが、レジデントが必要な生きた知識を得ている大きな理由と考えられます。そして、これらの人達は与えられるのを待つだけでなく自分から動くのも日本と異なる点です。この違いは、画一的詰め込み主義の日本と、小学校から能力別をとるアメリカの教育によるものでしょうか。ともあれ多くの知識を保有するのではなく、必要な知識を引きだせる力を持つ大切さを知らされました。そのためには月並ですが、人であり、それを支える制度が重要と痛感させられました。

（脳神経外科　講　師）

# 第7回卒業証書授与式

第7回卒業証書授与式は3月25日(月)午前10時30分から本学体育館において挙行された。

式は本学室内合奏団によるクラシックの調べが流れる中、学長が卒業生113名(内女子学生9名)ひとりひとりに卒業証書を手渡して祝福。「新しい思いつきは、精出して自分の仕事をしているとき、展望がひらけ、自分の考えが発展するのです。そして、興味をもって集中しているその時に限って生れるのです。

若々しい情熱をもって選んだ道を怖れず急がず休まずに進んでほしいと思います」と、はなむけの言葉を贈った。式終了後は、本学学生食堂で祝賀会が催され和やかな雰囲気のうちに終り、卒業生にとって大学生活最後の1日が終った。　(学生課)

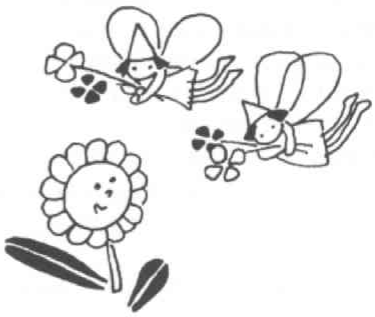
# 学位記授与式

3月25日(月)午前9時30分から本学第1会議室において医学研究科を修了した9名に医学博士の学位が授与された。

9名の氏名・専攻・学位論文題目は次のとおりです。

(学生課)

| 氏名 | 専攻 | 学位論文題目 |
|---|---|---|
| 三代川斉之 | 生体防御機構系<br>免疫学部門 | 9C4抗体により検出されるヒトクラスⅡ抗原の免疫化学的解析 —FA抗原との免疫化学的比較— |
| 熊井　恵美 | 生体情報調節系<br>神経科学部門 | Cytotoxic T lymphocyte (CTL)クローンを用いたHLA-DQ抗原機能の解析 |
| 竹内　章二 | 細胞・器官系<br>腫瘍学部門 | プロスタサイクリンの心機能、エネルギー代謝に及ぼす影響(灌流ラット心を用いて) |
| 長谷川　浩 | 生体防御機構系<br>病原微生物学部門 | 抗クラスⅡ単クローン抗体のautoreactive T-cell cloneに対する増殖抑制効果 |
| 上原　聡 | 生体情報調節系<br>情動科学部門 | 脂肪細胞glucagon受容体の解析と寒冷馴化によるglucagon受容体の変化に関する研究 |
| 大野　高子 | 生体情報調節系<br>神経科学部門 | 白内障摘出術による眼球光学系の変化 |
| 長島　泰行 | 生体情報調節系<br>神経科学部門 | Myoepithelial Cell Ultrastructure in the Submandibular Gland of Man(ヒト顎下腺における筋上皮細胞の微細構造) |
| 野中　聡 | 生体情報調節系<br>神経科学部門 | くしゃみの神経機構と呼・吸気ニューロン活動 |
| 林　秀雄 | 細胞・器官系<br>腫瘍学部門 | ポルフィリン系、フェオフォルバイド系誘導体の癌治療への応用に関する基礎的研究 |



# 昭和60年度入学式

昭和60年度入学式は、４月５日㈮午前10時から、本学体育館において挙行された。

新入生120名（内女子学生27名）

式では、学長が「本学は六年一貫教育が持色なので、自分の可能性を引き出す学習に積極的に取り組み、心を開いた他人との交わりを大切にしてほしい」と式辞があり、新入生を代表して會澤佳昭君が「学則その他の規程を遵守し勉学に励みます」と宣誓。式終了後は講義室において学年担当教官、図書課、学生課、保健管理センターからのガイダンスを受け、大学生活への第１歩を踏み出した。　（学生課）

昭和60年度入学者名簿

## 研　究　室　紹　介

■生物学■　　上口勇次郎

生物学教室では開設以来、一貫して実験動物の卵子、初期胚の染色体研究を行ってきた。ヒトにおける染色体異常の原因や発生機序を解明するためのモデル研究である。また、有効な新しい実験系を確立するために実験動物の改良も行ってきた。最近では、ヒトの精子染色体を直接研究する新しい方法も開発している。これらの成果は教室の方針として常に一流の国際誌を選んで発表されてきた。また、染色体及び先天異常関係の学会やシンポジウムで度々講演を依頼されるなど、関連分野で高い評価を得ている。特に卵子に及ぼす放射線の遺伝的影響に関する研究は国連の科学委員会から重要視されている。我々が確立した染色体研究法は世界の最先端を行く極めてユニークなものであり、これまで国内外の大学や研究所から第一線の研究者が数多く技術研修に訪れている。最近も、スエーデン王立科学アカデミーを通じて依頼があり、はるばる研修にやってくることになった。「旭川に世界の細胞遺伝学者を引きつけよう」という美甘教授の理想が現実のものとなってきて、教室員一同誇りとしているところである。このような発展は、教授の指導を受けた浜口助教授(現筑波大教授)、舟木教務職員(現鳥取大助手)、研究生の須田、小出、菅原、上田らの昼夜を別かため猛勉に負うところが大きい。この伝統を育てながら、上口(助教授)、立野(教務職員)、島田(研究生)は大いに頑張っている。上口も、立野も、研修者が訪れると技術指導に多忙を極めるが、研究者同士の交友が大きく広がって行くことに喜びを感じている。また、渡辺技官と彼女のチャイニーズハムスターは学内に隠れもない存在である。この動物は我々が研究や学生実習に利用するだけでなく、解剖学第二、細菌学、寄生虫学、内科学第二、産婦人科学の各講座で、いずれも前例のない重要な研究に利用されている。小桧山事務補助員は実験の準備、跡片付けから事務一般まで実に手際よく処理してくれる、なくてはならないありがたい人である。

教育面では1、2年生と大学院生の講義を担当している。特に実習には哺乳類の発生、ヒト染色体の分析など独特の内容が盛り込まれており、学生は夜遅くまでしぼられるが、「医科大学で教育を受けている実感が初めてわいた」と言う者も少なくない。

研究ばかりではなく、生物学教室らしい楽しみも色々ある。去年は釣りや高原温泉観楓会などのほか、教室の伝統行事の〝美食会〟も度々行われた。これまでこの会で我々の胃袋におさまった生物は留萌直送のフグ、アンコウ、厚岸直送のハナサキガニ、サケ、その他イワナ、シチメンチョウ、エゾシカなど枚挙にいとまがない。

我々は、生物学は食うことから始まったと信じている。

(生物学　助教授)

## 昭和60年度の主な行事

今年度の主な行事は次のとおりです。

| | |
|---|---|
| 4月5日 | 第13回入学式 |
| 4月15日～16日 | 新入生研修（第1回目） |
| 6月13日～16日 | 第11回医大祭 |
| 9月4日 | 体育大会 |
| 9月25日 | 解剖体慰霊式 |
| 10月28日～11月1日 | 新入生研修（第2回目） |
| 3月25日 | 第8回卒業式 |

(学生課)

## 昭和60年度運営組織

本学には、医学教育についての調査研究、教育課程の編成、修学指導、授業及び試験の実施、履修及び単位の修得、学籍関係等について審議する機関として教務委員会があります。

また、学生の厚生補導に関する調査研究、学生の課外活動、福利厚生等について審議する機関として厚生補導委員会があります。

両委員会の構成は次のとおりです。

(教務委員会)

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 石井　兼央（副学長） | |
| 副委員長 | 石橋　宏（図書館長） | |
| 委員 | 岩渕　次郎 | 美甘　和哉 |
| | 丸子　基夫 | 小野　一幸 |
| | 松嶋　少二 | 金沢　徹 |
| | 並木　正義 | 宮岸　勉 |
| | 大河原　章 | |

(厚生補導委員会)

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 石井　兼央（副学長） | |
| 副委員長 | 笹森　秀雄 | |
| 委員 | 安田　博 | 平塚　寿章 |
| | 黒島　晟汎 | 山村晃太郎 |
| | 山内　卓 | 八竹　直 |
| | 天羽　一夫 | 水元　俊裕 |

(学生課)

## 昭和60年度新入生研修(第1回目)

昭和60年度第1回目の新入生研修は、大学生活に一日でも早く慣れ親しむことを目的として、8つのグループ(1グループ15名)に分け、4月15日(月)・16日(火)の両日午後5時から午後7時まで本学、第2・第3・第4セミナー室及び和室で行われた。

(学生課)

## スポーツ安全協会傷害保険の加入について

最近、課外活動中の事故が増えている傾向にあり、事故発生の場合に備えて補償対策の確立が必要となっています。

スポーツ安全協会傷害保険は、体育系はもとより文化系活動を含む課外活動中の事故を補償するものなので、各学生団体にあっては、それぞれの活動内容と本保険の趣旨等を充分検討のうえできるだけ加入するようにしてください。

保険の概要は次のとおりですが詳細は学生課学生係に問い合せてください。

なお、今年度の加入受付期間は昭和61年1月31日までですが、本学での受付は書類の確認、手続き等の都合により1月16日までとします。

- 本保険に加入できる団体……スポーツ団体及びその他の社会教育団体で、指導監督者を置き、10名以上の団体員で構成されている団体

| 区　分 | | 対象となる団体 |
|---|---|---|
| 第1種 | B | 文化系団体 |
| | C | (第2種以外のスポーツを行う団体)<br>サイクリング等 |
| 第2種<br>競技別大学(学生)連盟等に登録または加盟している団体及びAのスポーツを行う団体 | A | 山岳等 |
| | B | 空手・柔道・合気道・スキー・ラグビー<br>サッカー 等 |
| | C | 剣道・弓道・卓球・庭球・バスケットボール<br>バレーボール・バドミントン・陸上競技<br>水泳・ゴルフ・ボディービル 等 |

- 保険料と保険金額

| 区　分 | | 保険料(年間) | 死亡・後遺障害保険金 | 入院保険金 日額 | 通院保険金 日額 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第1種 | B | 420円 | 1,200万円 | 3,700円 | 1,000円 |
| | C | 1,040円 | | | |
| 第2種 | A | 18,240円 | | | |
| | B | 4,300円 | | | |
| | C | 1,570円 | | | |

- 保険期間……昭和60年4月1日午前0時(加入手続完了の翌日の午前0時)より昭和61年3月31日午後12時まで
- 対象となる傷害……被保険者が次に掲げる場合に急激かつ偶然な外来の事故によって被った傷害
  ①被保険者の所属する団体の管理下における活動中
  ア、所定の場所・時間に集合し待機している間
  イ、団体の活動実施中、移動中および休憩中
  ウ、所定の場所・時間に解散のため待期している間
  ②団体が指定する集合・解散場所と被保険者の住所との通常の経路の往復中
- 支払われる保険金…… 入院保険金と通院保険金は、治療日数7日以上の傷害に限られ次のとおり支払われる。
  入院保険金―事故の日から180日を限度として1日につき所定の入院保険金日額が支払われる
  通院保険金―事故の日から180日のうち実際に治療を受けた通院日数に対し90日を限度として1日につき所定の通院保険金日額が支払われる

(学生課)

## 第27回東医体全競技終了 夏季・冬季総合準優勝!!

第27回東日本医科学生総合体育大会は、3月末に行われたスキー部門をもって、夏季・冬季全競技が終了した。

本学は、3部門(陸上競技・バスケットボール女子・弓道)に優勝するなど夏季大会総合5位と好成績を収めまた、冬季大会でもラグビー4位、スキー男子優勝・女子準優勝と健闘し、総合優勝を勝ち取った。この結果、夏季・冬季総合 準優勝というすばらしい成績であった。

(学生課)

**第27回東日本医科学生総合体育大会**

**(冬季)スキー部門成績**

3／26～29　山形蔵王スキー場(主管　山形大学)

男子　**優勝(旭医大)**・2位(北　大)・3位(札医大)

女子　優勝(女子医)・**2位(旭医大)**・3位(秋田大)

(男子)　**大回転**1位横山(3年)・2位蔦原(5年)　**回転**1位木ノ内(4年)　**15km**1位石井(4年)・2位石原(5年)・3位汲田(6年)　**8km**1位石井(4年)・3位石原(5年)**リレー**1位(石井・石原汲田・加藤)

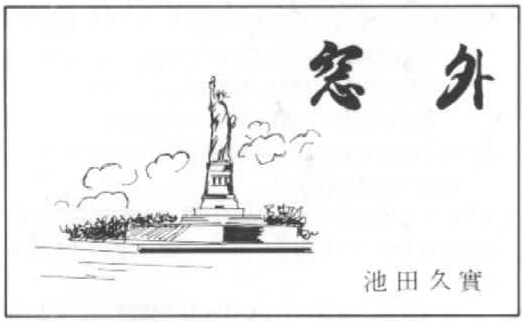
(女子)　**3km**1位信本(3年)　**5km**1位信本(3年)　2位谷(3年)

## 課外活動物品の返却について

学生諸君の一部に、課外活動用物品を借用期限が過ぎても未だ返却しない者がおり、貸出業務に支障をきたしています。他の学生諸君の迷惑になるので、必ず借用期限内に返却しましょう。

また、借用物品は、次に借りる身になってていねいに取り扱い、汚損、破損のないように注意しましょう。

(学生課)




**体験的米国医療事情**

数年前のこと、私は家族ともども約2年間ニューヨークでの生活を経験した。その間私達は2年間にしては多すぎるほどの医療上の体験をした。帰国後も同様な医療行為を体験するにつけ、彼我の違いを感じることがあったので、記憶が薄れぬうちにこの紙面を拝借して、その医療体験をいささか感情的に記してみることにする。

周知のごとく、米国の医療体制はいわゆるオープンシステムであるから、通常患者が直接大きな病院を受診するということはない。しかるべく開業の先生のオフィス(医院というよりはオフィスという雰囲気)に電話すると受け付けの女性(と思われる)が応対に出る。彼女たち(若くない場合が多い)は医療の心得があるらしく、要領よく問診し受診の時間を予約してくれる。予約した時間にオフィスに行っても待たずに受診できる場合はまれである。診察が時間通りにいかないことが多いからである。　忙しい(つまり流行っている)先生の場合には、予約が15分程度の刻みであるため、予定が遅れに遅れ、待合室で小一時間、診察室に入ってから30分と待たされることが常であった。その間先生は蝶のように診察室の間を飛びまわる。時間通りにいかないのは、我が旭医大でも同様と思われる。しかし彼の地では処方のため薬局で長時間待たされるということは一度もなかった。院外処方制度の長所であろうか。時間外の診療はオフィスを主宰するベテラン医師の若いパートナーが受けもつ場合が多いようである。診察料については私達の経験では本人がその場で払い込み、後日加入している組合に申告して払い戻しをうける場合が多かった。ただし入院等で費用がかさむ場合は、請求書を勤務先の事務担当者に手渡すだけでよい。この申告制度は受けた医療行為にどれだけ費用がかかったかを本人に知らせること、及び適正な診療であったか否かを組合側でチェックし、場合によっては請求内容を診療者側に変更させ得るという利点がある。私達の場合、請求内容の変更が少くとも1回あったと記憶している。我が国では、彼の地ほどチェックが厳重ではないようである。反面このような制度は手間と時間がかかりすぎる。

私の長女は2年間で合計3回、手術のための入院を体験している。我が国のように乳幼児の場合でも手術1～2週前に入院ということはなく、入院後1～2日で手術は行われる。入院前に行った検査データがそのまま活用されるのだろうが、術前入院観察の期間が少々短かすぎて不安であった。ただし入院時のチェックは厳重で、例えば発熱等でコンディションが悪ければ手術のための入院は不可である。また我国で時々体験するごとく、診療科が違えば、同じ検査を再度くりかえすというムダは省かれている。　乳幼児の入院の場合は、親が付き添うことになるのは我が国と同様であるが、親子があの狭い患者用のベッドに一緒に寝るなどという殆んど非人間的な現象はみられなかった。入院中看護婦によるチェックはかなり頻回に行われ、我が国の大病院(特に名を秘す)の場合のように看護婦が患者の状態をチェックするヒマがないほど、デスクワークに追われているという本末転倒の事態にはなっていないようである。全般に診療側が患者側を納得させるための努力をしているようで治療の結果はどうあれ、患者側に不満が残る場合は少ないようである。

最後に、以上のことは限られた体験に基ずいた個人的印象記であって、これを普遍化するつもりは全くないことを付記しておきたい。

(前病理学第二講座　助教授)